



## 幼稚園時代の思い出あれこれ

多田鉄雄

明治四十三年から足掛け三年が私の幼稚園時代であった。

幼稚園は神田駿河台下にあり、小川町へかけて商店街の電車通りをちょっと入ったところ、住宅と店やが入り混った街角で、猫のひたいほどの庭に銀杏の大本が一本門柱とならんで立っており、枝垂柳の木が幾本か板塀にそって立っていたのをおぼえている。その園舎はのちに幼稚園が池袋に移転したあと、創業後ほど経た石川一美氏の主婦之友社が現在の場所に移る前にしばらく社屋にしていたはずである。近所に五十年様と呼びならわされたお稲荷があつて、五の日、十の日の縁日の夜は相当の人出で、父母に連れられ夕食にそこを見歩く時は、きっと何人かの幼稚園友だちに出会うのであつた。ともかくも同じ神田にあつた岸辺福雄氏の東洋幼稚園が出来てやや間もない頃である。

T先生のことを今でもはつきりおぼえている。眼も口も大きく、あまり人好きのしない、どちらかと云うと、どぎつい顔であつたが、ガラガラしている裡に、情愛の深さが子ども心にも感じとられ、私は好きであつた。その頃は明治三十七八年の日露戦争からだいぶ年月が立っていたけれど、子どもたちの間では、相変らず戦争ごっこが盛んであつた。T先生は古新聞を細長く巻いてその先を丸く曲げてひもでゆわえ、サーベルを作ることを教えてくれた。この巻き方が簡単ではなく、つよく巻かないとしっかりしたサーベルが出来上らないので練習が必要だつた。また同じ古新聞でカブトのような帽子を折らせ、それをかぶらせた。それで私たちは、いっばし武装した軍人になりきることが出来、「僕は黒木大将だ」、「僕は乃木大将だ」、「僕は黒木大将だ」といったわけで、そのサ

ーベルで打ち合うのであった。これは棒切れてやるような危険がないばかりでなく、私たちは打たれる痛みが大したことではないとわかっていたので、手加減などせず、思うぞんぶんに相手の頭でも顔でも腕でも打込むことが出来たから、胸がすいて実に愉快であった。T先生は更に女の子をも動員した。やはり古新聞で看護婦の帽子を折らせ、正面に赤い折紙を切って赤十字に貼ったものをかぶらせた。すると私たち男の子は、しばらく打ち合うと床板の上に負傷した気持になってわざと倒れる。女の子が二三人、組になって頭と脚をかかえて負傷者を片隅に運ぶのである。そして医者になり看護婦になって手当し介抱してくれる。男の子は男の子でこうして小憩をとり、またサーベルを作り直しなどして出陣する。T先生はすべてがフェアにおこなわれるように見守りながら、楽しそうに、しかも総指揮官然として立っているのであった。私たちは何度もこの遊びをT先生にせがんだものである。この遊びがT先生の創意であったかどうかは、勿論私は知らない。しかし戦争ごっこそのものの可否は別として、この古新聞を利用した安全な遊び、そして幼児の闘争心と云うか、打ち合いたい衝動と云うか、そうしたものをフェアな形で発散させる遊び、更に女の子にもそれなりにじゅうぶんの役割を与えている遊びを展開させたT先生に私は今も敬意を

持つのである。

人は思いがけないことで、また全く思いもよらずに他人の心をきずつけることがあるものである。私の記憶では幼稚園時代に思うぞんぶんにふるまったおぼえはあるが、友だちをいじめようとした気持は更になかったと思っっている。現在某音楽大学のピアノ科の教授をしておられるO氏は私と同年輩であり、数十年來の友人であるが、私の中学時代の友人の紹介でO氏と知り合っしてしばらくのち、たまたまお互に幼稚園時代の思い出になったことがある。話してみると私と同じ幼稚園出身である。とすれば年令が同じだから当然二人は一緒に幼稚園に通っていたはずである。ところがO氏は一年足らずで幼稚園を休み勝ちになり、小学校へ入る直前の頃はすっかり幼稚園へ行かなくなってしまったそうである。その理由はと聞くと、O氏をいじめる子どもがいて幼稚園に行くのが嫌になったと云う。私は當時を思い出して、いわゆるボスだった数人の子どもの名をあげて、O氏をいじめたのはこれこれのものかとたずねたところ、O氏は、「そうではない、僕をいじめた子はこう云う名前だった」と云う。それは私の呼び名であって、その当時、私以外にその呼び名をもった子はいなかったから、まさにO氏をいじめて幼稚園をやめさせ

たのは私にほかならなかったわけである。私はたしかにボスの一人であったかも知れなかったが、まさかと思っていた。私はやや赤面しながら、それでどんないじめ方をしたのかと聞くと、一番よくおぼえているのは「お前のお弁当のおかずを見せる」と強制されたりしたことだと云うのである。思い当った。私はほんとに友だちのお弁当に関心をもっていたのである。それというのが、私の住居は幼稚園に隣っていたから昼食をたべに家へ帰るように命ぜられていた。そんなわけで私はいつもお弁当をもってくる他の子どもたちが羨しかったのである。それでおそらくほかの子どもたちのお弁当が見たかったにちがいない。このO氏との出来ごと、当時のO氏の心理、私の心理、私の行動は、幼児の教育を考える私に今にいろいろの示唆を与えてくれている。

Sという女の子は眼のパッチリした頬の赤いとても可愛い子どもであった。私は好きで好きでたまらなかった。いつの頃からそうした愛情が深まっていったのかはおぼえていないが、いつとはなしにSも私のそばをはなれなくなり、何のあそびもいつも一しよにいて、たとえば先に述べた戦争ごっこの時など、Sは必ず私のところの看護婦長だった。だから保育室で、席の入れ換えが命ぜられて、二人が離れ離れにされ

るときなど先生が恨めしく思われるほどであった。いよいよ幼稚園の卒業式も迫ってきて、Sは私とちがってお茶の水の小学校へ行くことになったので、学校がちがえば一しよに遊ぶこともだんだん出来なくなると思うと、何か不安でたまらなかった。学校へ通うようになってからも、きつと遊んでくれるように何度か約束した。それでも心配で、あれこれと心をいためた末、ある日、思い切って部屋の間を呼び込み、誰もそばにいないのを見とどけてから「君大きくなったら僕のお嫁さんになってくれる？」と聞いて見た。Sは真顔でうなづいてくれた。それから数日間は鬼の首でもとったようである、嬉しくて随分はしゃいでいたのを今でもおぼえている。小学校にあがってからも一日おきぐらいに二人は一しよに遊んだ。そしてまた遊ぶゲンマンをして別れるのであった。ある日Sが妹をつれて来たので、私は「邪魔だから帰しなさい」と云って帰させたことがあった。ミソツカスが足手まといになるといふことのほかに、私はたしかにSを独占してその妹からも離しておきたい気持が働いていたようである。しばらくしてまた妹を連れて来た日があった。Sは「お母さんが妹も一しよに遊んでやりなさいと云うので」と云って、私がまた連れて来たことをなじっても、今度は妹を帰そうとはしなかった。私は怒って「それじゃ、もう遊ばない」と云ってしま

った。Sは悄然と妹の手を引いて帰って行った。意地と悔恨が交互に私の胸を支配した。四五日して私は思いきつてSの家へ誘いに出掛けた。ところがSは学校に何か催しがあってまだ帰宅していないとのことであった。Sの方からはその後ついに誘いに来なかった。私も「もう遊ばない」と云ってしまったことが頭にこびりついていて、二度と誘いに行く勇気が出なかった。一年たつてしまい、二年たつてしまい、Sのことをほとんど忘れてしまつていた三年目のある日、道でばったり行き会つた。Sはにっこり笑つて会釈したが、Sも私もおとなになつていたようで、とりすましたまま別れてしまった。私が中学一年のとき、Sが学校の帰りらしく、電車通りの向う側を一人で歩いて来るのを、私は友だちと一しょに歩きながら遠くから見つけたが、そのままだった。それから数年して、Sが急性肺炎か何かで死んで行ったことを人づてに知つた。Sは私が「もう遊ばない」と云つたことなど、もう怒つてもいなくなつたらうし、私のことなど忘れてしまつていたのかもしれない。けれども私は謝罪して和解する機会を永久に失つてしまつたことが悔いられた。今でも園児の中で特に仲よしの男女がむつまじく遊んでいる場面に出会つたりますと、おのずとほほえまれながらも、Sのことが思い浮ばれてきて、ほのかな何か心が触れてくるのである。

たしか小学校へ入る前の年のことだと思ふ。家の勝手口に物乞いの老婆が立つて「何かめぐんでやつて下さい」といねいに頭を下げていたのであつた。私はそのあわれな姿を見ているうちに何か自分まで悲しいような気持になつて、家の者に頼んで握り飯を一つ作ってもらい、その老婆に手渡しした。すると老婆は「どうもありがとうございます。坊ちゃん、きつといつか神様があなたを助けて下さいますよ」と云うのであつた。そして私はほんとに老婆に云われたように、いつか神様が私を助けてくれる時が来るような気がしたものである。その記憶が妙に消えないで時折思い起される。私は考ふる。特に同情深く生れついているわけではない私が、あの時どうしてあのような気持になつたのであろうかと。私は兄弟姉妹が多かつたので、その頃祖母の部屋で祖母と寝起きしてゐた。そして祖母は信心家であつたが、寝物語りに、よく不幸な人の話、運のわるい人の話を私に聞かせてくれたことである。それが私にこの気持——私は憫隠の情の芽生えと見るが——を培つたのではないかと思ふ。あるいは幼稚園の教育の結果であつたらうか。正直のところ私にはわからないままでいるのであるが、それにつけても今やかましい論議の道徳教育のことに、信仰の問題とからみ合つて、考えが移つていくのである。